



男は 痛い



國友万裕

第36回

『アルプススタンドの
はしの方』

1. コロナの日々

今、この原稿を書いている時点、「第二波（？）コロナ」の真っ只中である。4月ほどの深刻味はないが、毎日感染者が増えていて、これからどうなるのか先が読めない。この原稿がアップされる頃には減っているのか増えているのか、それも全く読めないという状況が続いている。

俺の周りでは、コロナに対する反応は二通りに分かれる。

俺が仲の良いある先生は、コロナのことを極度に怯えていて、後期もオンライン授業であってくれんことを期待しているようだった。彼はお母さんと同居しているので70歳以上の人が感染すると命に関わることになるため、余計に神経質になるらしい。彼自身も4月ごろ体調が悪くなって、コロナかと心配していた時期があった。医者に行ったらコロナではないと言われて、どうにか安心したみたいだが、死を意識したりもしたようだ。そういう人たちからすると、街でマスクをつけていない人を見ただけで腹が立ってくるらしい。

俺はというと、普段が人と接する機会がないので、コロナ前は大学で人と接することができるのが貴重な気晴らしになっていた。大学の近所で行きつけのお店で、店の人と語りながら、昼飯を食べるのもリラックスの時間だった。しかし、この4ヶ月は、ひたすら自宅でコンピューターの画面に向かう生活だった。授業も会議も学会も全てオンライン。オンライン上で接していてもそれなりに楽しい面もあるのだが、外に出ないので、体重は5キロ以上増えた。何よりも体力が落ちてしまったみたいで、ちょっと外に出るのもつらくなってしまった。今は映画館、スポーツクラブ、飲食店、全て解禁になったのでまだマシだが、4月ごろは緊急事態宣言でほとんどのところが閉まっていたため、本当に閉塞感でノイローゼになりそうだった。

やっと少し和らいできたと思っていたら、第二波である。本当にひどいものだ。コロナは第三次

世界大戦だという人もいるが、まさしく戦時下とはこんなものなのかと思うことも度々だった。他の人たちも皆俺と同じ事態の中にいるわけだから耐えなきゃいけない。だけど、イライラは募る。一体、いつになったら通常の生活に戻れるのか。もうコロナ以前の生活に戻ることはないのだろうか。

俺の行きつけの飲食店は年配の人がやっているところが多いので、これがきっかけで店を止める人も出るかもしれない。再び対面授業が始まって、大学に行く頃には閉店になっているお店もたくさんあるに違いない。もう年金をもらえる年の人たちだし、この機会に辞めるかという流れになりそうな気がするのだ。こんな形でお世話になった人たちと別れるのは悲しいけども、考えようによっては、仰々しい別れに比べればいいかもしれない。俺は大袈裟なことが何よりも嫌いなのだ。さりげなく、コロナと共に去りぬである。

そんな中で不登校の子にとっては、「学校は素晴らしい」という大合唱になるのは重荷だという記事も読んだ。俺は元祖不登校なのでその気持ちもよくわかる。コロナとなって、学校に行かなくなったことで、学校で得るものが得られないということを感じ始めた子たちの叫びが飛び交っていくため、不登校の子たちは、「じゃあ、俺たちは大切なものをえない生活をずっとしているのだ」ということを常に思い知らされることなる。いたたまれなくなるのだろう。

その一方で、不登校とまでは行かないけど、学校が嫌いだという子たちはむしろ楽だというふうにも思っているらしい。大学生の場合は遠方から通う子が多いため、大阪から京都まで通うのは面倒くさい。朝も早く起きなきゃいけない。でもオンライン授業だったら5分前に起きればいい。オンライン授業の場合は学生のプライバシーや通信量のことを配慮して、無理には顔を出させないでくれと言われてるので、学生の方はほとんど顔を出そうとはしない。パジャマ姿で授業を聞いていることもあるみたいだし、寝っ転がって聞いている子もいるみたいだ。それでも聞いてくれるの

だったらマシな方で、自分が当たっていないときには席を外してしまっている子もいるだろう。

オンライン授業も必ずしも悪いとばかりとは言えない面もあることには気付かされた。オンラインの方が学生たちは自分の意見や感想をきちっと話してくれる。対面授業だと照れ臭がって発言を求めても話そうとはしないのだが、オンラインとなると顔が見えないから言いやすいらしい。確実にたくさん話してくれる。

それに、この4ヶ月間で、オンライン技術を習得できた。かつては使ったこともないような機能をどんどん使うことになったため、様々なことがわかっていった。70歳過ぎて、教壇に立てなくなったら、パソコンを使って何か仕事を始めようかとも思うようになった。

文部科学省は対面を復活させたいと思っているらしい。今年の1年生は確かに特殊だ。遠方から入学した子の中には、下宿代だけ払って、実家からオンライン授業を受けている子もたくさんいる。入学式もなかったのも、大学にはまだきたことすら無いという学生もいる。推薦で入った学生もいるので本当に一度も大学を見たこともないという子もいるのだ。

大学の方は、大学によって対応は分かれている。前期から対面授業を復活させたところもあるが、大抵のところはオンラインだ。問題なのは後期である。もう早々とオンラインに決めてしまったところもあるが、大抵のところはまだ今のところ微妙である。おそらく、理系の科目は実習があるので対面をしないわけにはいかない。一方で、大講義を担当する先生たちは、後期もオンラインだという通知が早々と来たと聞いている。

しかし、俺たちのような語学教師は微妙な状況である。一応、今の流れだと英語のような少人数クラスは対面、大講義はオンラインと考えている大学が多いようだが、東京の方では来年も対面と早くに決めてしまった大学もあると聞いている。

対面授業を再開するということになる問題が山積される。大学に登校して、語学の授業を体面

で受けた後、学生たちがどこでオンライン授業を受けるのか。もし、大学で自分のクラスで感染者が出たりしたら大変なことになる。きちっと感染防止対策をした上で、授業することになるのであるこれ神経をすり減らすことになるだろう。

政府の発表では、第二波は感染者が多くても4月とは訳が違う。まず何よりも検査数を大幅に増やしているし、感染者の大半は若い人たちだから軽症である。人工呼吸器をつけている人は少ない。死者数もインフルエンザで死ぬ人よりも少ないらしい。

むしろ経済を回さなかったら、自殺者、倒産、リストラなどが続いて、デメリットの方がはるかに大きい。結果的にコロナよりもはるかに多くの人々が死ぬということになるのかもしれない。とは言っても、コロナに感染したら死ぬ可能性の高齢者たちを蔑ろにするわけにはいかないだろう。目の前に死という恐怖がぶら下がるということになるため、慎重に考えるしかないのだ。

個人的には俺は56歳と半年だからまだコロナで死ぬ人が多い年ではない。しかし、コロナのおかげで体重はどんどん増えていく。自宅ですべて仕事をしていたので、夏の暑さは感じずに済んだ。いつも6月から7月にかけては暑い中をバスや電車で行ったり来たりだったのだ。しかし、おかげで体力が相当落ちたことを痛感する。俺はこのところコロナを言い訳にして、スポーツクラブや運動もサボってきたのだ。

学生たちもオンラインの方が自分のペースでやれるのでむしろ勉強できるという学生もいるし、逆にやはり気合が入らないという学生もいて、賛否両論のようである。

無理に始めることはないのだろうが、始まったから始まったでそれに対応するしかない。俺の教えていると大学はもうすでにオンラインに決めたところもあるのだが、まだ対面することを予定している大学もある。とりあえず、後期もオンラインになるということ的前提にして生きようと思う。もう成り行きに任せて、なるようになるさ！とい

う気持ちで生きるしかないのだ。

何よりも怖いのは、先生も学生もだんだんとオンラインに慣らされてきているので、極端にこれが進んでいけば、大学のキャンパスだって要らなくなる。それこそ、大学のプラットホームみたいなものを作れば、海外の大学の授業だって日本から受講できることになる。

その方がお金がはるかにかからないし、合理化である。しかし、そうなってくるとこれまで慣れ親しんだ象牙の塔・レンガの建物が世の中から消えていくことになるのだ。そこまで極端なことは起きないだろうけど、今大学は不景気なので、絶対にそうならないとは限らないのだった。

2. 公正世界仮説！？

ついに義理の叔父が亡くなった。母より11歳年上なので93歳である。大往生だし、しかも最近まで健康だったので、天寿を全うした雰囲気である。大病にかかることもなく、これだけ長く生きることができたのは幸せだったと思う。

母方の叔母は最近になってボケが始まって、病院に入院しているらしい。まだ70代で、体は健康なのだが、変な幻覚を抱いてしまい、娘の職場にまで迷惑をかけ始めたので強制入院させるしかなかったらしいのだ。

身近にコロナ感染者も出た。普段注意して生活していたのに、思わぬところから病気や不幸は入り込んでくる。一方で、俺はコロナを舐めていたが、全然かからずここまできた。人間は理不尽なのだ。

俺もあと20年かなあと考える。この10年間くらいは本当に幸せだった。本を2冊出せた。友達も山のようにできた。

俺のFBの友達は現時点で339人である。先輩や同僚の先生たち、大学の元教え子たち、出版社の人たち、プロテスタントの牧師さんたち、アメリカで知り合った人たち、映画関連の仕事をしている人たち、行きつけのカフェで知り合った人た

ち、そして身内が数人、もう満杯状況で誰か入る余地がない。これ以上、人間関係が広がれば頭が回らなくなって、パンクしてしまうだろう。

したがって、もう新しい友人を開拓しようとも思わなくなってしまっている。

その一方で、一番の親友が九州の友達のところ遊びに行くという話を聞くとなんとなく羨ましいし、恋人を取られるような気持ちになる。いくら友達が増えたとは言っても、親友と呼べる人は彼しかいない。彼とは 20 年も友情を保っているし、彼との関係が壊れたら相当凹むだろう。

しかし、人間の人生はいつ何が起きるかわからないのだ。

コロナの時代になって、公正世界仮説という言葉を知った。何事も本人次第だという考え方である。コロナに感染した有名人たちが、「すいません。ご迷惑をおかけしました」と頭を下げる。これはどう考えたって変な話だ。コロナの被害にあった上に多くの人に謝罪する！？ この頃はコロナハラスメントも起きていて、コロナの感染者の中には自分の家に住めなくなって、自殺した人もいるという話である。

これは公正世界仮説のせいなのだ。人間は正しい行いをしていれば、災難には見舞われない。何か自分に落ち度があったからこんなことになるのだという考えである。

俺は、こういう考え方が死ぬほど嫌いだ。俺が大学を目指していた頃のことだ。当時、受験生向けの雑誌を買っていたのだが、そこに悩みの相談のコーナーがあって、そこで悩みの相談役になっている女性がまさしく公正世界仮説支持というか、いい子ぶりっこというか、酷いことをされても、自分に何か至らない点があるからだと思えようという返事ばかりする人だった。

俺はこの雑誌を買うたびにこのページを破り捨てていたものだ。この人はよほど幸せな人生を歩んできたに違いなかった。誰にも理解してもらえないような苦しみを経験した人だったら、社会を公正だなんて思うことは到底できないだろう。

学歴マイノリティでいろいろなところで白眼視をされ続けていた俺は、こういう人を見ると怒りを覚えていた。何の悪いこともしていない人を白眼視する社会。何が起きても、私が悪いんだと思いましょという社会。

そういう社会では、結局その時点でいじめやすい、弱者の人がいじめの的になってしまう。

今は不登校に対しての理解も深まっているが、あの当時不登校はまだ悪い子というイメージがあって、だからいじめてもいいのだという発想だった。LGBT にしてもそうだ。今は理解が深まっているが、昔はそんなやつ変態なのだからいじめて構わないという発想だった。今度はコロナ。コロナになるやつは悪いやつだからいじめて構わないという発想！

時代は流れて、いじめの対象がどんどん変わっていきただけのことで、世の中のいじめの構造は変わらない。大人がこうなのだから、子供のいじめが解決しないのも仕方がない。

こんな社会のどこが公正なの???

3. 翔ぶのが怖い！

映画関連の仕事をなさっている知り合いの男性が、今度短編映画を作るので出演してくれる人を探していると SNS に書かれていた。40 代の男性を募集しているとのことで、「僕は年齢的に無理ですね」とコメントしたところ、「國友さんだったらアリです」という返事。その人は台本を俺のメールに送ってきた。

俺は数年前に学生が制作する映画に先生役で出たことがある。ちょい役なのだが、映画の撮影ってこんなものなのかと思ったものだった。映画の場合はカメラを回し続けるのではなく、細かくカットを重ねてつなげていくので、小さな場面を何回もやらされる。その間、役のままの気持ちを保っているのが大変である。役者さんも楽じゃないなあと思ったものだった。

今回話をもちかけてきた人は、メジャーな人で

はないがこれまでたくさんの映画を手掛けてきたプロなので、学生が作る映画とはわけが違う。ちょっと出てみたいという自己顕示欲もあった。しかし、台本を見てみるとなんと濃厚なベッドシーンが最後に用意されている笑。ということは、裸にならなきゃいけないんだなあ、映画で見せられるような身体じゃなしなあ、というわけでお断りすることになった。

この間『ぐらんぶる』という映画を見た。これ原作は漫画なのだそうだが、とりあえず男の子の裸を見せるのが目的のような映画である。裸になるのが大好きな若い男たちの裸演技をたっぷりと見せてくれるが、ストーリーの方はどうなっているのかよく理解できない笑。彼らの裸が楽しければ、それはそれでいいということなのだろうか。

俺は若い頃も裸が似合うような男じゃなかった。自分の殻を破るためには、映画で裸になるという、大きなことにチャレンジしたりするのもいいのかもと思ったものだ。この年になってくると日々の生活に新鮮味を感じる事がなくなってくるのだ。

とは言いながらも、気の小さい俺はその仕事を引き受けることはできないのだった笑笑。翔ぶのが怖い！である。

4. エトセトラ

この4ヶ月間は本当に早かった。家で仕事してあまり事件が起きないせいなのだろうが、例年よりもさらに早く感じて、あっという間に期末になってしまった。

何がこの4ヶ月間に起きたのか？

あるお店でアップルパイを食べた。そのお店、お洒落なお店でカレーとケーキとドリンクのセットで2000円くらいである。俺は行くたびにケーキはアップルパイをと頼んでいたのだが、いつだって売り切れいたり、今日は焼いていないと言われてたりで、代わりにチーズケーキを頼んでいた。このチーズケーキもなんとも言えないくらい美味しいし、カレーも辛めだけどすごく美味しい。で

も、アップルパイ食べてみたいなあと思っていたものだ。

店の若い女性は俺の顔を覚えていて、「いつもきていただいているのに申し訳ありません。今度土曜日にアップルパイ焼きますから」と前もって教えてくれた。そして、その日、待望のアップルパイを食べたのだった。アップルパイにアイスクリームが添えられているのだが、たまらないくらいの美味しさ。思わず、幸せがこみ上げてきたものだ。

しかし、それにしても店の中は若い女性ばかりだった。コロナが減っている時期だったので、皆向かい合ってぺちゃくちゃ喋っている。ほんの1、2人彼女と思しき女性ときている若い男性もいたが、初老のおじさんは俺だけだ。なんとなく罰が悪い。俺たちの年になったら、こういうお店じゃなくて居酒屋に行くのだろう。だけど、俺は酒を飲むのが好きじゃない。

5月の終わり頃、一番の親友が尼崎に住んでいるので、お好み焼きを食べて、温泉に行った。これは何度もしてきたことだ。彼とは毎日ラインのやりとりもしている。

7月からレジ袋が有料となった。で、500円のエコバッグを買ったのだが、これがなかなか面倒臭い。俺は毎日コンビニに何度も行くのだが、レジに並ぶたびにバッグを取り出して、買ったものを入れなきゃいけない。時間がかかる。後ろにお客さんが待っているのに……。こんなコロナの最中にレジ袋の有料化を決めなくてもと思ったものだ。5円出せばレジ袋に店員さんが入れてくれる。それだったら、もうエコバッグなんてもって行かなくてもいいかもしれんと思ったものだ。エコロジーの点から考えても大して効果はないのだという人だっているし。とにかく、コロナのせいで、レジで並ぶことすら苛立っているのだった。

マッサージに来てくれている友人は、結婚して子供ができてからがなかなか遊んでくれない。その彼がこの8月に妻さんと一緒に店を出すことになった。これはコロナのおかげである。これまで店を出すのは大変だからとなかなか踏ん切りがつか

かなかったみたいなのだが、コロナでしばらく暇が続いて、生活費も福祉に借りに行かなきゃいけないような状況になって、それでもう店をするしかないと覚悟を決めたみたいだった。

店を開いても、俺の家には変わらずきてくれると言っているから、店には行かない方がいいだろう。彼の妻さんには会わないままの方がいいと俺はずっと思っている。彼の話だと、彼の妻さん、俺と性格が似ているらしい。人の好き嫌いが激しくて、嫌いなものは徹底的に受け入れない。常にごちゃごちゃ文句を言っている。ちょっとしたことで憂鬱になる。俺のことだって、きっと嫌いだろいうなあ笑。

「そんな妻さんじゃ、子供育てたりできないんじゃないの」と俺がいうと、「いや、一生懸命する人なんですよ。一生懸命だからちょっと上手くいかないことがあるとイライラする人なんですよ笑」と彼。「じゃあ、俺と本当に似ているよね笑笑」と俺。「僕の周りって、そういう性格の人ばかりなんですよね。僕は『イライラしない』というのが座右の銘なんだけど。」と彼は言った。

彼は本当に偏見や気負いが無い人で付き合いしているとのんびりした気持ちになる人だ。俺みたいな性格の人を受け入れてくれる人だ。そういう人も世の中にいるのだから、もっと自信を持った方がいいのかもしれないのだった。

近所のパスタ屋さんではすっかり常連になった。第一波のコロナが落ち着いてやっとお客さんが少し戻ってきたと思っていたら、第二波でまた再び来なくなったとおっしゃっていた。「國友さんみたいに常連さんがくると元気付けられるんですよ」と言ってくれた。俺も結構感謝してもらっているみたいだ。

『劇場』を Amazon プライムで見た。行定勲監督の映画は最初の『Go』が最高に良くて、いきなりキネマ旬報1位のデビューだったはずだが、その後の映画はいまいちだった。だけど今度はいい。こんな殊勝な女が世の中にはいるのかと思ったものだ。相手の男はダメ男なのだけど、彼女はそれ

を受け入れようとする。しかし、結局最後には彼女の方から別れることになる。女性のリアリズムである。

渡哲也が亡くなった。この人、重病で入院したことが何度かあったはずで、78歳まで生きていらしたことが不思議なくらいである。淡路島生まれで、昔気質のお父さんから相当なスパルタ教育を受けて、毎日ビンタされていた、だから息子にもそういう教育をしたのだということがスポーツ新聞では美談みたいに書かれている。男は男らしく、殴られてもへこたれるなというメッセージを送っているのはスポーツ新聞である。おー、右翼。身の毛がよだつ。本当にそうなの？おそらく、相当話を盛っているのだと思われる。この人、お父さんから離れた後ぐれた経験もある人なので、スパルタ教育が全面的に良いとは思っていないだろう。メディアは物事を単純に伝えてしまうのである。そう言えば、渡さんの『誘拐』はとても良かった。息子思いのお父さん役だった。ご冥福をお祈りしたい。

先日、映画を見に行った後、自転車を出そうとしたら、自転車置き場がぎゅうぎゅうに詰まっていた、出れない。通りかかった若い女性が手伝ってくれた。「なかなか難しいですよ」と流暢な日本語だったが、おそらく南欧系の女性である。欧米の女性の方がこせこせしていない。正々堂々と親切で好感が持てる。やはりクリスチャンだなあ。

俺の日常はこんなものなのだ。特別変わった経験はなく過ぎていく。結局、誰からも理解されることなく、女性と付き合うこともなく、一生は終わっていくのだろうか。それはそれで構わない。でも、なんとなく味気ない毎日である。だけど、それなりに幸せ。

5. 『アルプススタンドのはしの方』

(城定秀夫監督)

今回のおすすめ映画はこれである。

低予算映画で何と高校野球の野球場のベンチの

一角が映画の主たる舞台で、そこで試合を観戦している高校生たちを描いていく。試合の風景すら映さない映画だ。

とりあえず、若い子たちが生き生きと描かれているので、そこに感動する人は多いだろう。今年公開になった日本映画の中でも最も評価は高い。

しかし、俺はこういう映画を見るとまた自分の高校の頃を思って悲しくなる。この連載をずっと読んでくれている人はわかってくれるだろう。俺にはこういう時代がなかったのだった。

今年はコロナのせいで、社会全体が曇り空である。こういう時だと尚更明るくできないし、下手にケラケラしていると、三密になると怒られるだろう。

俺はいつそのことコロナが大きく社会を変えてくれることを祈っている。今大変な思いをしている人はたくさんいるけども、ここで社会の膿を全て出して、第三次大戦の終戦から再スタート。

そういう日が来れば良いなあ。俺の脳味噌の中も全てリニューアルである。